

# 下肢の外傷疾患

北アルプス医療センターあづみ病院  
整形外科医長

狩野 修治

第3回では骨粗鬆症をベースにご高齢の方が受傷することが多い、大腿骨転子部骨折と大腿骨頸部骨折について紹介させていただきました。予防のために骨粗鬆症の治療が有用と紹介しましたが、骨粗鬆症の有効な治療薬の一つであるビスホスホネート薬を長期間内服していると非定型大腿骨骨折を生じることがあるとされています。（ただし、直接的な因果関係は証明されておりません。）第4回ではこの非定型大腿骨骨折について紹介させていただきます。

## ■ 非定型大腿骨骨折とは

典型的な大腿骨骨折は交通事故などの高エネルギーの外傷で生じることが多いのですが、非定型大腿骨骨折は立った状態からの転倒といった軽微な外力で受傷します。単径部または大腿部の鈍痛またはうずくような痛みなどの前駆症状があることが多いようです。

## ■ 症状

繰り返してしまいますが、単径部または大腿骨の鈍痛またはうずくような痛みといった前駆症状がおこるとされています。この段階で大腿骨に微小な損傷を繰り返しているとされます。大腿骨の単純レントゲン写真では骨の表面に変形をみとめ、MRIなどで診断が可能です。

立った状態からの転倒といった軽微な外傷で大腿骨骨折を起こしてしまい、痛みのため動けなくなってしまいます。

## ■ 診断

骨折後は単純X線写真で診断できる場合がほとんどです。しかし、はつきりとした骨折のない前駆症状での段階ではCT・MRI・骨シンチグラフィーといった検査で診断できます。

## ■ 予防

非定型大腿骨骨折の発生率は32／59／100万人・年と報告されています。そのうちビスホスホネート薬を使用している方の割合の報告は12～90%と幅がありますが、ビスホスホネート薬の内服期間が長いほど発生リスクがあがるといわれています。直接的な因果関係は証明されておりませんが、長期間内服されている方で前述のような前駆症状に心当たりがある方は主治医と相談してください。

## ■ 治療方法

大腿骨骨折をおこしてしまった場合は骨折部の固定が必要となります。髓内釘という骨内に心棒をいれ固定する手術が一般的です。しかし一般的な大腿骨骨折より骨癒合が遅くなることがあります。また骨粗鬆症の治療薬の変更を考慮する必要があります。

また前駆症状をみとめ、画像診断（単純レントゲン、CT、MRI、骨シンチグラフィーなど）で診断できた場合、予防的に手術をおこなうこともあります。また骨粗鬆症の治療薬の変更をする必要があります。

の変更を考慮する必要があります。ただし、骨粗鬆症の治療薬のうち、脊椎椎体骨折や大腿骨頸部・転子部骨折といった骨粗鬆症による骨脆弱性によつておこるといわれる骨折の予防効果を考慮すると、ビスホスホネート薬は骨粗鬆症の治療にとても有用な薬剤のため、安易に中止した方がよいとはなりません。処方していただいている主治医と相談してください。

